

社会科

1 育成したい「思考力」

社会的事象について、事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別して特色を捉えたり、その特色から問いをつくり、時間的・空間的・公的視野の広がりの中で事象相互を関係づけ、その意味や価値を捉えたりして、社会の全体像を再構成する力

社会科は、私たちが生きる現実社会を理解し、公民的資質の基礎を養うことを究極のねらいとする。よって、授業を窓に社会の姿が分かる授業づくりが求められる。そのためには、一つ一つの社会的事象の目に見える部分を知ることにとどまらず、目に見えない事象の意味や価値を理解し、社会の姿を総合的に判断し、子ども自身が「私たちの生きている社会はこうなっていた」と思い描く必要がある。この見えるものから見えないものをつかむ過程で働くのが上記「思考力」である。これは、以下の三つの層から成り立っているものである。

(1) 比較・類別する思考【第1の層】

比較

追究対象である社会的事象が内包する事実を、他の事象が内包する事実と比べ、事実の共通点・差異点を見いだす。

類別

追究対象である社会的事象が内包する事実を、観点ごとに分類する。

「事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別して特色を捉える」とは、対象となる事象が何で、他とどこが同じで何が異なるのか、といった事象そのものを捉えることである。具体的には、事象の目に見える部分を丹念に調べ、事象を構成する事実や関連する事実を比べたり、事実を集めて仲間分けしたりすることを通して、一つの、または複数の事象の特色を明らかにすることを指す。その際には、一つ一つの事実が子どもの経験と結び付いた状態で理解されていることに留意する必要がある。次に示すのは比較・類別する思考の具体である。

第3学年「めぐって 見えた 学校のまわり」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

住宅や店の広がり、公共施設の位置、道路の様子等を手がかりに、探検したコースを比較・類別する力

追究対象である学校の周りの様子について、家、店、人、車のそれぞれの様子を手がかりにして、学校の南ルートと西ルート比べた。それによって、子どもたちは広い道路の辺りにはお店や大きな車が多いが、狭い道路の辺りには家や自転車で通る人が多いという差異点や、全体に家が多いという共通点を見いだしていった。このように学校の周りの特色を捉える際に働くのが比較する思考である。

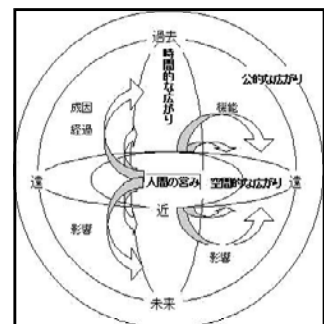


その後、捉えた地域ごとの特色を基に、上記の視点を手がかりにし【共通点、差異点を探す】て地域を仲間分けし、市全体の特色を捉えた。これが類別する思考である。

(2) 関係づける思考【第2の層】

「特色から問いをつくり、時間的・空間的・公的視野の広がりの中で事象相互を関係づける」とは、第1の層でつかんだ特色には、意味や価値があるのではないかと考え、学習問題を作り、時間的・空間的・公的視野の広がりの中で、事象の相互関係を探っていくことである。社会的事象の構造は複雑であり、他の多くの事象とも関係し合っ成り立っている。「その意味や価値を捉える」とは、こうした事象の機能、成因、影響等を明らかにすることである。

社会的事象に特色が現れるのは、社会を構成する人間の営みの結果だからである。そこには必ず人々の願いに基づく工夫や努力があり、動機や改善策となった事象が存在する。その関係する事象を時



【視野を広げて事象を関係づける】

空間、立場を広げて探り、事象相互の関係を「原因と結果」「目的と手段」のように関係づけ、その意味や価値を明らかにすることを指す。次に関係づける思考の具体を示す。

○ 「時間的」な視野の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究対象である事象が存在している「時」から、過去や現在、未来へと時間的に視野を広げていく中に存在するさまざまな事象との関係を考える。

第5学年「これからの食料生産ー瀬戸内鱈の資源管理ー」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

激減した瀬戸内鱈の資源回復について、時間的・空間的・公的視野を広げ、どのような取り組みによって資源が回復してきたのかを予想し、資料から、長期的展望に立った広域的な協力体制によって「みんなで育て、あとでとる」取り組みが、鱈資源を増やしたことを捉える。

瀬戸内鱈の激減という課題について、今すぐ解決することは難しくとも、未来において解決するために何かできるのではないかと考えた。「鱈の漁獲量の推移」と「鱈を増やす取り組み年表」をつなぎ、鱈資源が回復してきたこと（結果）と、鱈の稚魚を放流し、秋漁を自粛したこと（原因）とを関係づけた。これが、時間を広げて原因と結果を関係づける思考である。



【時間的視野を広げる】

○ 「空間的」な視野の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

追究対象である事象が存在している「位置」から、空間的に広げていく中に存在するさまざまな事象との関係を考える。

（単元及び本単元で育成したい「思考力」は上記と同じ）

瀬戸内鱈の激減という課題の解決は、香川県内の取り組みだけでは難しいが、広域の協力体制によって可能ではないか、と考えた。「鱈の回遊範囲」と「鱈を放流している所」の地図資料をつなぎ、鱈資源が回復してきたこと（結果）と、県の取り組みが瀬戸内海沿岸11府県に広がり、協力して鱈の稚魚を放流してきたこと（原因）とを関係づけた。これが、空間を広げて事象どうしを関係づける思考である。



【空間的視野を広げる】

○ 「公的」な視野の広がりの中に存在するさまざまな事象と関係づける

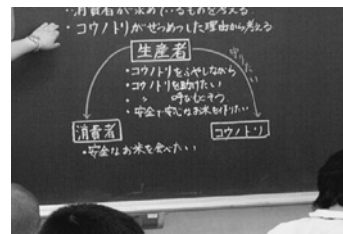
追究する社会的事象を、「自分とのかかわり」（私）という立場から、「社会全体とのかかわり」（公）という立場に視野を広げていく中で、そこに存在する事象との関係を考える。

第5学年「私たちの生活と食料生産ー日本の主食、米の秘密を探るー」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

我が国の農業について、調査、表現等を通して得た生産者の営みを比較・類別し、国民生活の維持向上や自然環境と関係づけて、その特色や意味を捉える力

水田で生き物を飼う理由を探るための複数の視点の中で、私から公へと立場を広げ、生産者や消費者の立場に立って考える必要があると考えた。そこで栽培面積と出荷量に関する資料を基に、農業を使わない安全なお米を育ててきたこと（結果）を、消費者の安全、安心なお米がいいという思い（原因）等と関係づけた。その際働くのが、公的視野を広げて事象どうしを関係づける思考である。



【公的視野を広げる】

（3）再構成する思考【第3の層】

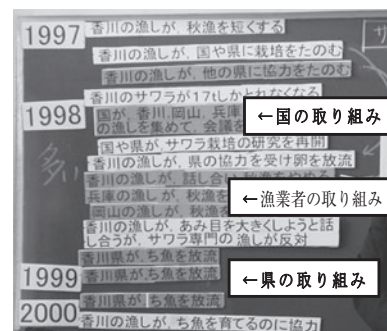
「社会の全体像を再構成する」とは、事象の意味や価値を、子どもが思い描く社会の全体像の中に位置づけることである。子どもは生活経験や既習事項から現実社会を解釈している。それは、学ぶ前の断片的な情報を基に、子どもなりに社会について概念を構成していると言えるのである。教材からの学びや友達との学び合いの中で解釈を磨き合い、修正したり、より妥当性の高いものに組み替えたりすることを「社会の全体像を再構成する」と表現した。

2 思考活動を保障するために

○ 学習対象をいくつかの部分に分け、それらを子どもが選択できるようにする

第5学年「なぜ、逃がす？資源管理型漁業」では、昔から県民に食べられてきた魚である鯖の漁獲量を安定させるために、誰がどんな取り組みをしたのかを調べた。その際、時系列でさまざまな出来事が並んでいる年表を「誰が取り組んだことか」という視点で色分けをさせた。

それによって、取り組みの主体が漁業者、または国や県のどちらであるのかを明確にすることができた。国や県の存在を捉えることができた子どもたちは、どの立場から考えるのかを明らかにして、最も効果的な取り組みを関係図にしながら思考活動を進めていった。

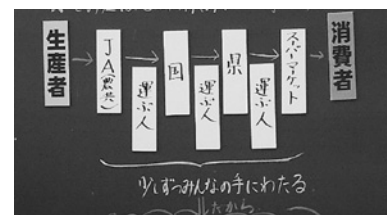


【年表を色分けする】

○ 学習対象の変化の前後と、その間を明確にする

第5学年「私たちの生活と食糧生産ー日本人の主食、米づくりの秘密を探るー」では、生産者は、消費者が米を買う価格の約半分の金額しか受け取っていないことに疑問をもち、その理由を考えた。解決の見通しをもつ際は、生産者と消費者の間にいる人を手がかりにした。しかし、具体的に、生産者から消費者に渡すお米と費用の流れが捉えにくいことが予想された。

そこで、板書に米が運ばれる起点と終点である生産者と消費者をつなぎ、米が渡る順に間にいる人を位置づけていった。それによって、子どもたちは、間にいる人に目をつけて、思考活動を進めていった。



【板書で米の輸送の間を明確にする】

○ 学習対象をまとめて配列するとともに、操作や表出等による作業化を図る

第5学年「わたしたちのくらしと国土ー暖かい地方のくらしー」では、雨が多い沖縄県で、タンクに水をためている理由を考えた。しかし、解決の見通しを話し合う際、例えば地形を手がかりにするという意見が出されても、そのことばだけでは地形の違いを十分に捉えられないために、高低差や川の長さを知識として活用できないことが想定された。

そこで、香川県と沖縄県の立体地図を横並びに提示した。そして、手ざわりで調べたり色の広がりを見たりするといった作業を通して香川県と沖縄県の様子を確認することで、地形の違いを捉えることができるようにした。

さらに、予想の検証の際は、その立体地図に色水をかけ、その水の流れる様子や残った水の量を比べることで、「沖縄県は、平地が狭い上に川が短いため、雨がたまらない」と地形的な特徴を理解していった。これによって子どもたちは、沖縄県でタンクに水をためる理由を探る思考活動を進めていった。



【立体地図で地形を比べる】

「イメージ化」については、次頁以降の実践例で詳細を記載する。